

# エンカウンター（ENCOUNTER）

## 第 60 号

平成 19 年 4 月 20 日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 045-912-1960

神谷美恵子著作集 第 3 巻「こころの旅」より（6）

### こころの友を求めて

親にも語れないことを話せる友や師を求めるのは青年期の特徴である。青年期における友とはたいてい同性の者からえられる。フロイトによれば学童期に潜在していた性的なものが思春期にふたたび表面に出てくるといふ。あるいは同性の友を求めるころはふつうの場合、異性愛の前段階といえるのかもしれない。同性ばかりいる学校ではよくお目にかかる問題である。

...

青春期の友情も崇拜も一生つづくとは限らないし、その必要は必ずしもない。青年の一時期の成長に役立つだけでも意味がある。しかしもし若き日に一生をつらぬくほどの友や師とのこころの交わりが与えられたら、それは人生の最大の幸福の一つにちがいない。現代の社会や学校はこうした人間的な「出会い」の機会をどのくらい提供しているのであろうか。青年にとって知識以上にたいせつなこころの糧はこうした「われとなんじ」の体験であると思う。

## 配偶者の選択

さて一夫一婦制度は必ずしも人間にとって厳密に守るのがらくではないらしく、欧米でも日本でもこれが単なるたてまえに墮していることが少なくない。しかし、少なくともこれは子どもを育てる巢を用意するものとしては人類が長い間かかってあみ出した知恵の一つであろう。また男女の結びつきをもっとも恒久的な、人格的なものにしうる機会もこの制度が提供するのではなからうか。...

理想を語り、夢みるのもいいが、結婚は恋愛とちがい、現実との対決であり、かなり平凡な日常生活のつまかさねというきびしい面がある。これは結婚に社会性という側面が大きくそなわっていることによるとともに、自己と相手の現実に初めてなまのかたちでぶつかり、両者を日々融和させなくてはならないためであろう。愛というものが現実というテストでためされるわけである。他人の目にどうみえようとも、夫婦はお互いの存在のために、おのおの多少とも身をけずることが要求される。それは必ずしも相手が要求するのではなく、結婚というものが要求するのだ。この「身のけずりかた」が二人のどちらかのほうに、あまりにもかたよりすぎていては、結婚の持続も場合によってはむつかしいことになる。その辺まで見越すことは「配偶者えらび」の段階ではかなり困難なので、結婚に踏み切るにはつねに冒険がともなう。ときには高い崖からとび降りるほどの勇気と決断が要ることだろう。しかし、だいたい、冒険なしの人生はありえない。人生のあらゆる曲りかどに選択という冒険がまちかまえているわけであるから。冒険を避ける人はただ萎縮するほかはないだろう。

## 人生の旅路なかばに

「神曲」の有名なこの書き出しの句の中で、ダンテは自分が 35 歳のときに「くらい森にまよった」としている。彼は 37 歳のときフロレンスから追放されたが、放浪の中で書き出した「神曲」の冒頭は力強いことばと心理的深みにみちている。

人生の旅路半ばに私は暗い森の中にさまよいこみ、まっすぐな道を見失った。あの野蛮な、苛酷な、密林のことを語るのは何とむづかしいことだろう。そのことを考えるだけでも私の恐れはよみがえる。死のほうがましと思えるほどひどいものだった。」

現代でも 30 代後半から 40 代の初めというのは、一つの危機ともいえる悩み多い時期だといわれる。心理的にいえば青年期の感情の波もおさまり、現実への適応性が増す時期であるのに、なぜこういうことになるかと考えてみれば、一つの原因はそろそろ始まる老化という生理現象、それに伴う成人病のきざしなどがこころの生活に反映しているためであろう。もう一つは男女ともに家庭や職業への責任感と執着からくるさまざまな悩みや葛藤であろう。...

たとえば日本のある高名な評論家は、...一年間じっと病臥している間、病気が治ったらある専門分野の勉強をすっかり初めからやり直したいと決心したという。このことは...その後勇気と根気をもって実行に移され、この人はやがて着実な研究者となっていた。

「新しい道」「新しい生きかた」は人によって何かの事業であったり、奉仕であったりするかも知れない。いずれにしてもそれは自分に残されている半生を、ほんとうに自分がやりたいこと、なすべきことにささげようという意味の方向転換であろう。こういう決心をするとき、人のこころには「もうよけいなことをしている暇はない。なるべく自分にとって本質的なことをやろう」という思いが満ちあふれていることであろう。

## 老いの自覚

気質、健康、社会的条件、経済的条件によって向老期をどう受けとめるか、のちがいがどんなに大きいかの例として、ローマの政治家キケロ(前106 - 43年)が63歳のときに書いた「老いについて」という有名な対話篇をあげておこう。この中では83歳になるカトーが二人の若者と話をしているという設定が行われており、カトーの言葉にキケロの考えがこめられていると見られる。初め若者の一人が、カトーのみごとな老いかたに感服していると述べると、カトーは次のような意味のことを答える。

「自然がもたらすものに、悪いと考えるべきものは一つもない。老いもその一つである。自分には、老いは決してやって来ないと平生考えていて、とつぜん老いにおそわれる、と行ってぐちをいう人があるならば、それはその人が自分をあざむいていたにすぎないのだ。」

こう言ってカトーは老年のよい面をほめたたえ、死へ近づくことについて次のように語る。

「死も悪いことではない。死によって人間の靈魂は完全に抹殺されるか、それとも永遠の生命に導かれるか、そのどちらかだ。前者の場合には何も恐れることはないし、後者の場合はよろこぶべきことではないか。」

カトーという人物の口を借りてキケロが右のように述べたときは、まだ元気で公の活動もさかんにやっていたころだから、こんなに断言的なことばを記すことができたのかも知れない。彼はこの年にたくさんのものを書き、翌年亡くなっている。

注 カトー(前234 - 前149)古代ローマの政治家、文人。執政官。  
大カトー。

## 新しい生き方の工夫

人間は老いてからもなお新しい生き方を工夫する必要があるのはたしかであろう。...

つまり、老いてなお盛んな活動欲をみずから抑制し、ペースをゆるめて、休み休みできることをやって行くことによって心身に残ったエネルギー相応の生活のしかたを工夫し、実行したということなのだろう。これには並々ならぬ自制心と克己心を要したにちがいない。

向老期の人間が早晚ぶつかる問題はこの体力減退のことのほか、現役を退いたあと、経済をどうするか、生活時間のわりふりをどうするか、若い人たちとの関係など、いろいろある。新しい状況に応じて生活のしかたをガラリと変える必要にせまられることもある。それは個人個人にとってひどくちがうから、ここではもう少し一般的な、しかも重要なところの問題を次に考えてみよう。

## 老いと時間

老いつつある人間もまた生命あるかぎり、未来にむかって歩いて行かなければ、いたずらに過去を振り返る、ぐちっぽい、同じことばかり話す存在にしかなり得ないだろう。しかし、このさい、時間というものに対する感じ方が若いころとはひどくちがってくることを考えておかなくてはならない。ミンコウスキーの名著『生きられる時間』には「年をとるといふ感情」について次のように述べてある。

「若いということは、20歳であるということよりも、自分の力の横溢を感じ、前進感に満ち溢れていることである。それは未来の時間によって制約されない計画が立てられる時期である。

これに反して年をとるといふことは停止することであり、後に留まることである。それは 私にはもはや人生に於て何もする時間がない という反省をさせられることである。...」

この生命の遅滞感の裏には、人が老年になるにつれて、時間を短く感じるという事実がある。すでにウィリアム・ジェームスが言ったことだが、多くの人を経験的にみとめていることだろう。子どものときに感じられた一日、一ヵ月、一年の長さを思い出すだけでもそれは明らかである。...また、時間の持続の感じかたは、個人の生活の全体の持続時間に反比例するものなのであろう、とジャネが言ったのはよく知られている。つまり、20歳の人間は1年を20分の1と感じ、60歳では60分の1と感じる、という。...

いずれにせよ、年とるにしたがって仕事を持続する力が減り、また仕事を進める速度もおちるから、一定時間内に果しうる仕事の量は減るにちがいない。したがって「しごとの量をこなす」ことだけを人生の目標にしてきた人にとっては、「時間が足りない」というあせりと徒労感もでてくるだろう。それよりもゆうゆうと自分のペースでしごとを楽しむ境地こそ老年にふさわしい。

### 第3のコペルニクスの転回

時間というものはきわめてふしぎな、哲学的な問題であって、青年時代にこの問題の思いをひそめる人は必ずしも少なくないかもしれない。しかし、壮年期ともなれば深く考える暇もなくなり、「社会的時間」にくみこまれ、職種によっては分単位、秒単位の物理的時間に従って仕事に追われ、体内の生物学的リズムにさからった生活を送らなければならない人も現代社会には多い。...

このことをよく自覚して、向老期のころから、自主的に自分なりのペースで「生きる時間」の用いかた、配分のしかたを考え、また時間そのものについても洞察を深め、「超時間的に」時間を観ずることができるようになるのが望ましい。そうすれば自分の一生の時間も、悠久たる永遠の時間から切り取られた、ごく小さな一部分に過ぎないことに気づくであろう。...

永遠の時間は自分の生れる前にもあったように、自分が死んだあとにもあるのだろう。人類が死にたえても、地球がなくなっても、この「宇宙的時間」はつづくのだろう。自分はもともとその「宇宙的時間」に属していたのだ。だからその時間は自分の生きている間も自分の存在を貫き、これに浸透していたのだ。げんに一生のうち、その「永遠の今」を瞬間的にでも味わう恵みを与えられたひともある。...

こういう宇宙的時間の永遠性に対する感覚が生れてくるにしたがって「コペルニクスの転回」は深められ、ついには青年期に垣間見られた第二の転回よりはるかに徹底した第三の転回に行きつくのだろう。それに従って、老いつつある人間にも死を越える未来が開けるだろう。すべてはその永遠の時間に合一するための歩みと感じられてくるであろう。そのとき人間はどれだけの仕事を果たしたか、ということよりも、おかれたところに素直に存在する「ありかた」のほう的重要性を帯びてくるだろう。

## 老年について

晩年に自己をしずかにかえりみ、人生への諦観がふかまるとき、そのころにはしばしば宗教的というにふさわしい響き加わる。それを純粹にあらわすには、ことばよりも、たとえば音楽のほうが適している。この意味でバッハのゴールドベルグ変奏曲やフーガの技法ほどみごとなものはない。そこには人生への達観をさらに超えた、宇宙的ともいえる巨大な秩序への直観が歌いあげられている。ベートーベンの晩年の弦楽四重奏曲も、彼の他の作品とは全くちがった深みと静ひつをたたえたものとしてぬきんでている。死の近づきもたらしたみのりであろう。...

少なくとも中年期以後は死を覚悟しつつ生きる者のほうが、生をよりよく充実させ、死をも自然なところで迎えられるのではなからうか。

生が自然のものなら死もまた自然のものである。死をいたずらに恐れるよりも現在の一日一日をたいせつに行きて行こう。現在なお人生の美しいものにふれうることをよろこび、孤独の深まりゆくなかで静かに人生の味をかみしめつつ、さいごの旅の道のりを歩いて行こう。その旅の行きつく先は宇宙を支配する法そのものとの合体にほかならない。その合体の中にこそもっとも大きな安らぎのあることを、少なくとも高齢の人は直観しているようにみえることが多い。...

知能だけが人の存在意義を決めるものではない。知能や学歴如何にかかわらず、安らかな老いに到達した人の姿は、あとから来る世代を励ます力を持っている。彼らはおだやかなほほえみを浮かべ、ぐちも言わず、錯乱もしていない。有用性よりも「存在のしかた」そのものによってまわりの人びとをよろこばすところが幼児と共通している。こうしたあり方を妨げるものはもちろん数かぎりなくあるから、こういう老人に接するとき、やはり人間の可能性について心打たれるのである。



## 旅をかえりみて

以上、ヒトの一生のこころの旅をたどってきたが、第9章の初めでも述べたように、主として順調に長生きできた人の、各人生段階を大雑把に見るよりほかなかった。...

からだにとって空気や水や食物が必要なと同様に、こころには生きるよろこびが必要であることは一生を通じて変わらないことであつた。...

人間のこころのよろこびがどんなものかは、幼いころからしだいに明らかになって行つた。愛し愛されること、あそび、美しいものに接すること、学ぶこと、考えること、生み出すこと。...真にこころをよろこばすものを一身を投げかけてこれを深めて行くとき、そこに時空を越えたものを、たとえ瞬間的にでも畏敬の念をもって垣間見ることもあるだろう。...

いずれにせよ、人類は生きるかぎりこころのよろこびを必要とし、こころのよろこびがあるかぎり人は存続するだろう。たとえ廢墟の中からも新しい生活と文化を築いて行くことだろう。

生命の流れの上に浮かぶ「うたかた」にすぎなくても、ちょうど大海原を航海する船と船とがすれ違うとき、互いに挨拶のしらべを交わすように、人間も生きているあいだ、さまざまな人と出会い、互にこころのよろこびをわかち合い、しかもあとから来る者にこれを伝えて行くようにできているのではなからうか。実はこのことこそ真の「愛」というもので、それがこころの旅のゆたかさにとっていちばん大切な要素だと思ふのだが、あまり大切なことは、ことばで多く語るべきことではないように思われる。それでこれはヒトのこころの旅がかなでる音楽の余韻のようなものにとどめておくことにしたい。

## 「ハリール・ジブラーンの詩」より（４）

### 死について

神谷美恵子訳

今度は死について伺いたい、とアルミトラが言った。  
彼は言った。

死の秘密を知りたいのですか。

しかし、生の只中にこれを求めないで  
どうやって見つかるでしょうか。

闇に慣れた梟（ふくろう）は盲（めし）いていて  
光の神秘を明らかにすることができない。

（注）アルミトラ 巫女（みこ） 彼 予言者アル＝ムスターファー

もしほんとうに死の心を見たいと思うなら  
生命（いのち）そのものに向かって広く心を開きなさい。  
なぜなら川と海とが一つのものであるように  
生と死は一つのものなのだから。

あなたの希望（のぞみ）と願望（ねがい）の深みに  
彼岸（かなた）についての沈黙の知識がある。  
雪の下で夢見る種（たね）のように  
あなたのこころは春を夢みている。  
夢を信じなさい、  
なぜなら夢の中にこそ  
永遠への門が隠れているのだから。

死ぬとは風の中に裸で立ち、  
陽の中に溶けることではないか。  
呼吸（いき）をとめるとは絶間ない潮の動きからこれを放ち、  
何のさまたげもなく昇らせ、ひろがらせ、

神を求めるようにさせることではないか。  
沈黙の川から飲むとき  
そのとき初めてあなたは真に歌うだろう。  
山の頂きに辿（たど）りついたとき  
そのときこそあなたは昇り始めるだろう。  
からだが生土の中に横たわるとき  
そのときこそあなたは真に踊るだろう。

（神谷美恵子先生の解説）

生も死も、もっと大きな秩序の中の一部と考える時、死は新しい出発点と  
考えられることを、ジブラーンは多くの比喩を通して歌い上げています。